

宗教への招待

第一回

宗教の原点を問う

おのみね
大峯

あきら
顯

龍谷大学教授
大阪大学名誉教授
浄土真宗教学研究教授



宗教の真の再生のために

宗教とは何かという問題に、哲学の視点からアプローチしてみたいと思います。宗教の歴史的形態とか現状とかを問題にするのではなく、そもそも宗教をして宗教たらしめるゆえんのもの、それがないと宗教が宗教でなくなるもの、それはいったい何かという問題です。宗教の現象ではなく本質に直行するこの問いは、諸宗教についての科学的研究や一宗教とか一宗派の教義に関する神学（宗学）上の論議の枠をはみ出す一層

基礎的な問いです。今日の宗教にとって最も必要になっているのは、まさしくこの問いに他なりません。というのは、現代社会にひろがっている世俗化という現象は、たんにある特定の宗教や宗派に対しての無関心や反対ではなくて、総じて宗教そのものに対する無関心や反対だからです。どの宗教や宗派を選ぶかということではなく、どんな宗教をも選ばないという非宗教的な生き方が、大部分の現代人の生活パターンになっています。現代世界のこの世俗化は、すべてのものを巻きこむ巨大な激浪げきろうのようなものです。そういう激浪げきろうに立ち向かうには、既成の一宗教や一宗派の教義

をもってしては、とうてい不可能だと思います。たとえば、浄土真宗の教義をどんなに忠実に説いても、それだけでは人びとを浄土真宗の真理に本当に覚醒かくせいさせることはむつかしいでしょう。なぜかといいますと、世俗化ということは、教義の理解や伝達それ自身の内へも、こっそりと侵入していることがあるからです。

だから、今日われわれが帰っていくべきところは、たんに一宗派の教義の原点ではなく、すべての宗教をして宗教たらしめているところ、宗教そのものの原点なのです。

もちろん、今日の社会は、現象面だけを眺めますと、いろいろな新しい宗教団体が大衆を集めていて、宗教はたいへん盛んなようにも見えます。しかし、もう一歩さういふ現象の内部に立ち入って注意してみますと、かならずしもそうではないことがわかります。明らかに迷信や邪教といってよいものを除いても、大部分は宗教の一次的な代用品、疑似宗教であるように思われます。たしかにそこにも、既成宗教の教義や科学技術によつては満たされない心情の一種の宗教的要求がふくまれていることもあるでしょう。ただ、その要求が、正しく根源的な仕方では充足されてはいないわけです。それらの新しい宗教は、世俗化の波の上に咲いたあだ花のようなものであり、根本的には世俗化の一つの現象にすぎないと思います。多くの新宗教が社会事業に精を出したり、疑似政治的なポーズをとったりして、結局は現世利益げんせいりやくを説くこと以上に出てないのは、このことを物語っています。そういうものは、宗教の真の再生とは決していえないでしょう。



宗教本来の役目

このような世俗化にともなう既成宗教の衰退、疑似宗教の出現という状況の中にあつて、宗教とはそもそも何かという問いが、何としても回避することの許されない根本の問いとなってきました。どんなに進歩した科学技術も福祉国家の政治も、それだけでは人間の真の救いとなりえないことはわかり切ったことです。もし、現代にはもはや宗教など要らない、科学技術と福祉だけでたくさんだ、というのなら、そういう世俗化した現代の方が宗教より強いことになるわけですから、宗教の代りに現代という神を拝めばよいはずですが、しかし、どんなに世俗化した社会も、そんな現代教には改宗し切れない不安の中にあることは否定できないでしょう。要するに、現代においても、やはり、人間は人間自身を救えないわけです。

だから、宗教に無関心な現代社会の世俗化とは、本質的には宗教の問題なのです。世俗化という強大な現代的混迷の正体が、宗教的な性質の迷いである以上、その迷いから現代人が脱出する途は、真の宗教の再生以外のどこにもありえないのは明らかなことです。そ

のためには、いかなる科学も政治も決して代行することのできない、宗教本来の役目というものに対して、宗教自身が根本的に覚醒かくせいしなくてはなりません。科学や政治や道徳というような、時代と共に移り変わる人間の社会的いとなみ、人間と共に滅び去るようないとなみが、人間を本当に救えないことはわかり切ったことです。

西田幾多郎きたたらうという哲学者は、かつて、宗教というのは人間が考える人生の幸福というためのものではない、ということを行いました。たとえば、天の一角から巨大なエネルギーがあらわれて来て、地球も人類も全部ふっ飛んでしまうようなことがあっても、宗教の真理というものは滅びない、と言うのです。三千大千世界が火に包まれても、なお滅びることのないものにしてはじめて宗教の名にあたいすると言う、この哲学者の考えは実に正しいと思います。今日、宗教界に何よりも必要なのは、そのような視点の再構築だといえるでしょう。

シュライエルマッハーの宇宙感情

すべての宗教をして宗教たらしめている本質への問

いを最初に立てたのは、十八世紀から十九世紀にかけてのヨーロッパの哲学者たちです。これは、キリスト教という宗教が、現実の世界にアピールする力を少しずつ弱めてきた、という状況のためです。そういう哲学者たちのいろいろな宗教理解の中で、現代から見てもなお有効なものは、フリードリッヒ・シュライエルマッハー（一七六六—一八三四）の考え方だと思えます。ヨーロッパの宗教哲学は一般に、キリスト教の雰囲気の中で立てられていますから、どうしても「神」という観念が根本になっています。世界を創造した人格的な神の存在の証明、神の本質についての考察、そういう神と人間とが関係する仕方としての信仰などが、宗教哲学の問題とされたわけです。そういう中で、シュライエルマッハーだけは、神という観念を前提しないで、まったく新しい視点から宗教の本質を明らかにしたのです。

シュライエルマッハーは、その『宗教論』（一七九九年）の中で、宗教の本質は「宇宙の直観と感情」にある、と言っています。彼によれば、人間が宗教を持つとは、世界創造の神を信じるとか、罪を悔い改めて、死後に天国に生れることを期待している、というようなことではありません。そうではなくて、すべての人

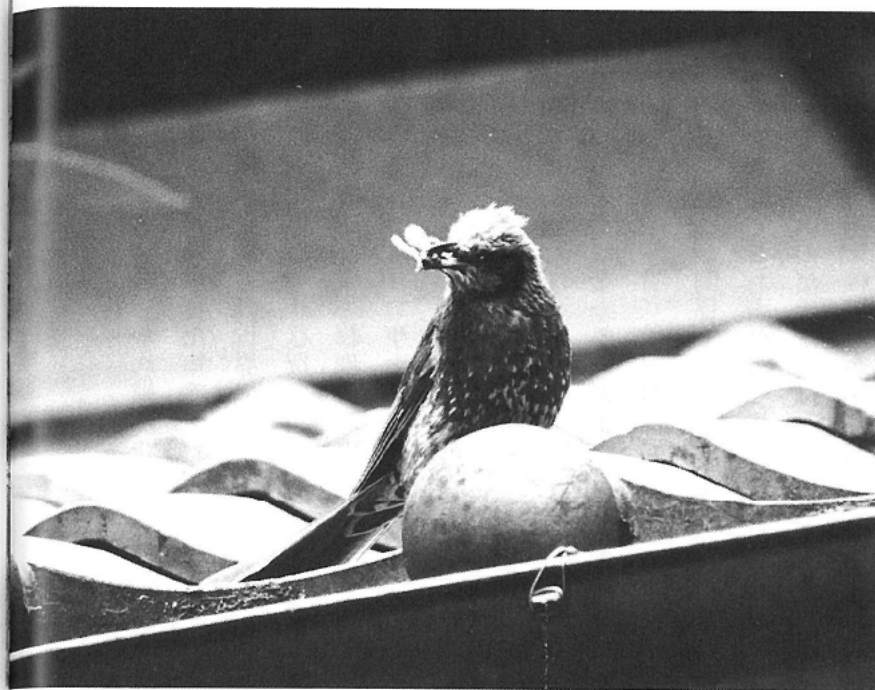


は、今すでにここにおいて、宇宙という広大無辺なるものの力によって生かされているという明々白々の事実を感じることだ、と言うのです。人間が生きているということの根底には、宇宙というものに全面的にまかせ切る他はないということがある、宗教とはこのよ

の考えは、人間存在が帯びている社会関係をはぎとつて、私たちをストレートに宇宙に面接させます。

人間は宇宙の中の赤子

人間はたしかに、歴史や社会の中に生きていますが、歴史や社会もまた宇宙の中にあります。社会的である



と同時に宇宙的であるのが、人間存在の具体的なあり方です。社会的存在としての人間のいとなみ、たとえば政治・経済・学問・科学技術・倫理などはすべて、人間と有限者との関係だといえます。そういういとなみにおいては、われわれはわれわれ自身の力を信じています。そこでは、人間は能動的であり、自由の主体として自分を意識しているわけです。しかし、そういう能動的な自己意識のもう一つ底に降りてみますと、そこには自分の力などはまったく働かない次元があります。それが宇宙に関係している人間の姿です。

社会関係においては有効である学識、才能、地位、権力は、そこでは何の力もちません。社会の中ではどんなに能動的な人間であっても、宇宙の中ではまったく無力であります。ちょうど赤子が母親に抱かれるように、人間存在はその根底においては、みな宇宙に抱かれて生きているわけです。人間が生きているときの深みには、人間の力ではない力が働いています。その力によってはじめて、この自分はこの自分なのです。そういう宇宙の絶対の力なくしては、私たちは生きることも死ぬこともできません。まことにシュライエルマッハーのいうように、われわれは宇宙の中では一人の赤子以外の何ものでもないのです。人間が宗教を持

つとは、そういう人間存在の、どうすることもできない裸の事実が目覚めることだ、とシュライエルマッハーは言ったのです。

シュライエルマッハーのこの宗教観は、宗教というものの本質を見事に射抜いていると思います。それは根本的に見れば、原始宗教(民族宗教)と歴史宗教(世界宗教)との双方を収めるだけの射程をもっていますし、とくに仏教やキリスト教については、今日でもこの考え方は正しいと思われる。けれども、今日の私たちの状況を念頭におきますと、これをもう少し補足する必要があります。一体シュライエルマッハーの時代は、人類がまだ理性の力の可能性を信じていた時代です。しかし、今日の私たちがすると、このような調和をもった宇宙感情をそのまま受け入れることは困難になっています。私たちを生かしている母なる宇宙の代りに、生命も精神もない物質過程としての自然科学的宇宙というものが、現代人の考えの中にひろく定着しているからです。

人間存在の根本不安

シュライエルマッハーの宗教哲学の中で、抜け落ち

ている大事な点が一つあります。それは、人間存在が宇宙の中にあるというときの人間の根本的な不安、というものが充分に問題にされなかった、という点です。シュライエルマッハーは、宇宙の中にある人間存在の肯定面、平安の側面を強調しています。けれども、私たちが宇宙の無限の中にあるということは、じつは大きな不安でもあると思います。むしろ、平安よりも不安が、宇宙の中に私たちが自分を発見するときの最初の感じではないでしょうか。有限者が無限の中にあるということは、有限者が無限の中へ吸い込まれ、無に消えていくというあり方を意味します。たとえば幾何学では、点には位置だけがあって大きさがありません。大きさが無いということは、無の中へ吸い込まれていく消滅点ということ。有限なもの、たえず無限の中へ消えるという仕方しか、存在することができないのです。そのことは、有限者にとって大きな不安であります。だから不安を持たない人間は一人もいません。なぜなら、不安というのは、私たちが無限の宇宙の中にあるという、そのことから由来する私たち自身のあることだからです。キェルケゴールが、すべての人間は不安である、と言ったり、ハイデッガーの哲学が、不安は現存在(人間存在)の根本気分だ、

と言うのは、その点です。

不安などというと、普通には、人間の主観的な意識現象、人間が抱いたり抱かなかったりする心理や感情のように思われがちです。しかし、そういう心理とか感情は、みな有限な物に対した場合のもので、それに対して、ここでいう不安というのは、無限の宇宙の中であって、無の中に消えていくという自己存在の姿が、意識よりもっと直接的に自分にわかっている、そういう事態を指します。それは、私たちのそういうあり方が、そのまま私たちに反射している気分ですから、根本気分といわれるわけです。人間存在が宇宙の中にあるというそのことが、すでに不安だということです。

私たちは、天気の良い日は晴れやかな気分になり、雨の日はうつとしい気分になります。医師にガン、かもしれないと言われると、ガンに対する恐怖感が生れますが、そうでなかったと言われると恐怖感は消えてしまいます。そういう種類の気分は、私たちの存在にとって偶然的な気分ですから、根本気分とはいえません。いかなるときでも、いかなる人間でも、人間であるかぎり、それから決してまぬかれていくことのできない根本気分、それが不安という気分です。不安は、

私たちの存在の根底には、私たちを支える何ものも無い、ということから直接に立ちのぼってくるのです。

宗教は生命そのものの要求

われわれは誰でも、本当は、何ひとつたよりになるものを持たないところで生きています。家族をたよりにしているといっても、家族はいつ死ぬかもしれません。会社や組織をたよりにしているといっても、そう



いう状態は永続するとはかぎりません。私たちの財産や地位や名誉を、私たちは死の彼方にまで持つていくことは不可能でしょう。いや、日頃私たちが最後のたよりにしている、この私たちの個体の生命それ自体さえ、いつ私たちのもとを立ち去るかもしれないのです。私たちの存在の根底には、安心して足をつける何ものもありません。そこには一つの深淵とくたが開かれています。私たちの人生は、そういう底無き深淵とくたの上に成り立っているのです。それが、私たちが宇宙の中にある、ということの実相です。

宗教とは、そういう人間存在の根本的な不安、人間がそれを忘れていようが否認しようが、変りない事実から生れてくる底知れない不安から脱却する途だといえます。だから、宗教を持つても持たなくても各人の

自由だ、というようなことは決していえないことになります。いかなる人間も、宇宙の中に吸いこまれていく不安な状況をいかにして脱け出るか、という根本的な課題を背負っているわけです。それは個人の主観的な思いを超えた生命そのものの要求であります。宗教なくして、人間存在は宇宙の中において真実には人間存在たりえないのです。歴史上にあらわれた世界宗教はみな、このような人間存在の根本的な解決の途を、それぞれの教義の言葉で説いているわけです。なかでも、大乘仏教とくに浄土教の思想には、それについての深い洞察が見られると思います。